

【UDON】

作者 浅羽一

「馬鹿野郎！」

と言いたい衝動を堪え、柴村は辛うじて笑顔を保った。あんパンだか食パンだか言う若い女性アナウンサーが、まるで彼の方を見向きもせず、「凄い、凄い」と彼の二の腕辺りを触っている。普通であれば嬉しい筈なのに、柴村にはむしろ自分が小馬鹿にされているように感じられた。

「このお店のうどんのコシは、この筋肉のおかげなんですわね」
さつきからずつと、見当違いの話を振られては、「いや、まあ」などと愛想笑いを浮かべて曖昧に頷いている。

うどんにコシを生む為に必要なのは、腕の力じゃなくて、腰。うどんのコシは腰が命。柴村にうどん作りを教えてくれた師匠の言葉を思い出しながら、彼は心の中で詫びる。身長180センチ、体重100キロを優に超える、筋骨隆々の柴村と比べると、師匠はまるで戦時中の子供のようだったが、結局、彼は師匠が死ぬまで、ただの一度も彼にうどんの味で勝てなかった。何が足りないのか、技術も手順もそっくりそのまま真似ている筈なのに、と悩む柴村に、師匠は根本まで吸った煙草の煙で目をしかめさせながら、「そりやおめえ、時間だろ」と言った。「技術と手順は足し算、後はそこにどんだけ精魂込めたかって時間を掛けて、初めてうどんの味が出来るんだ」

それじゃあ一生、敵わないじゃないかと不満そうな柴村に、師匠は「俺より長生きするこったな」と笑った。その一年後に師匠は死んだ。死んだその日の朝まで、新鮮な小麦粉からうどんを打っていた。うどん打ちにはまるで不必要だからかわれていた筋肉が、倒れている師匠を抱きかかえる時に役立つたのは、皮肉だった。

「それで、ご主人は先代の味を継がれたんですわね」

どうしてこのアナウンサーは言葉を発する度に、語尾を延ばすのだろうか。柴村はどちらかというところ、つやつやで弾力のある麺をグツと噛んだら、気持ち良いくらいにプツツと切れる、そんなうどんみたいなの、喋り方をする人に好感を抱く方だったので、余計に彼女の口調は馬鹿に思えた。そして同時に、テレビの前にいる視聴者は、そんな若い女の子に愛想笑いを振りまいている彼自身こそ馬鹿だと思っているに違いないと感じた。

「じゃあ、早速、うどんを一杯いただけませんか？」

やっとか、と思いつつも態度に出さず、彼は無機質なカメラのレンズから、ぐらぐらと湯が沸く大釜の方に体を向けた。そして麺を一玉、その中に入れる。

「はい。じゃあ、ここでいったん、お店の中を見せて頂きましょう」

麺が茹で上がるまで、今日の気候なら約十四分。その間、柴村に付き合っただけの釜の前に立つつもりはアナウンサーにも他のスタッフにも無いらしく、麺を優しくほぐす彼を一人残して、都会のテレビ屋連中はさつきと店内——と言っても、本来は製麺所なので極めて簡単に置かれたテーブルや椅子を、いかにも“こだわりの内装”とでも言うみたいなの調子で紹介し始めた。どうやら、ペタペタと何でもかんでも触るのは、あの女性アナウンサーの癖らしかった。

柴村は、鍋や釜の前に立つ時間が好きだった。失恋の傷が癒えずに鬱々とした日々を送っていた彼が、ほんの偶然に立ち寄った店。そこで初めて師匠と、そして彼の打ったうどんと出会い、その場で弟子入りを願った時、師匠は「うどん屋は、地味で、根気の要る仕事だ。儲からんしな」と断ったが、それでも負けじと頼み続けたのは、まさしく柴村の根

気の賜物だった。地味で辛い作業を、しかし自分に甘えず、延々と、黙々と、続ける。子供の頃からずっと筋トレを趣味にしていた柴村にとって、師匠の教えはむしろ素直に信じられるものだった。だからこそ、そんな師匠なので、彼ならこんなミーハーな取材なんて決して受けなかったに違いない。ハードな筋トレ後の筋肉痛よりも重たい痛みを胸に感じつつ、それでも柴村は油断無く釜の中で踊る麺の様子に目を懲らした。

（好きな相手と一緒に食べたなら恋が叶う『うどん屋』がある）

そんな噂が広まっているらしいと知ったのは、ある日突然、地元ラジオ局が取材を申し込んできた時だった。最初、全く何のことだか分からなかった柴村だったし、また下手に取材などを受けて面白半分客が増えるのは常連さんにも失礼だと思いついた。断ったのだが、そんな彼の背中を押したのは他でもない常連客だった。良くも悪くも田舎の人々だ、要するに楽しそうないベントに飢えていたのだ。で、とりあえず、その一回だけと言う約束で取材を受け、しかしそれにより思っていた以上に若い客が増え、馴染みの店が人気店になったと常連客も喜んでくれ、やがて気付けばあれよあれよと言う間に：

恋が叶う云々の話に心当たりがあるかと聞かれれば、柴村には全く無かった。ただ、「美味いうどんを食べば、誰でも笑顔になる」と言う師匠の口癖を思い出した。人を最も魅力的に見せるのが笑顔であるとするならば、柴村の――師匠のうどんは、間違いなく、この世で最も人を魅力的に見せる食べ物に違いない。だとすれば、そもそも一緒にうどんなんて地味な食い物を食べに来られる程度に親しい間柄であれば、ちよつとしたきっかけで恋に発展し、告白しようかなんて気になることだって、あるのかも知れない。

「もうそろそろですよ」

近くにいたスタッフに声を掛けると、すぐさまアナウンサーが戻ってきた。そして柴村は真っ白な湯気を上げる麺を釜から上げると、氷さながらに冷たい水で一気に麺をしめる。表面の輝きが変わり、麺に艶が生まれる。

陶製の白い器に麺を入れ、刻んだネギを載せ、熟れたザクロの実のように濃い色をした熱々の出汁をかける。「はい、どうぞ」

「うわあ、美味しそ〜」と叫びながら、アナウンサーがカメラマンに会い来いと手招く。「麺がまるで宝石みたいに光ってます〜」

良いから早く食べ、馬鹿野郎。と、言いたい気持ちを必死に抑え込み、柴村は「どうぞ、出汁が冷めない内に」と告げた。

「それでは、改めて、いただきます〜：んっ？ 美味しい〜」

チュルリと麺を啜るやいなや、浮かべられる満面の笑み。さすがは日本全国で人気のある女性アナウンサーだ、確かに、こんな表情を目の前で見れば、恋に落ちたっておかしくない。少しだけ、柴村はそれまでの彼女の無礼を許す気になった。美味いうどんは人を笑顔にする。そして人の笑顔は、それを見る人も笑顔にする。簡単に取り繕える言葉よりも、その顔こそが一番の感想だ。

本来であれば、適当に二、三口を食べたら次の展開に行く予定だったが、女性アナウンサーはしっかりと出汁まで飲み干してから、「では、この辺でスタジオの皆さんにも話を聞いてみましょう」とカメラに向かって言った。すぐさまスタッフが柴村へイヤホンを渡し、二人を事前に準備されていたモニターの前に導いた。その画面に、待ってましたとばかりに司会役である人気のお笑い芸人やその他のタレント、そして美しい女優が映し

出された。柴村は、近日公開の映画の宣伝にスタジオを訪れていた、その女優を見て、息を呑んだ。

『いや、めっちゃ美味そうですね！』などと口々に言う芸人らの声がイヤホン越しに聞こえる中、女優はさすがと言うべきか、静かに微笑んだままで一言も発しない。

こっちこっち、とアナウンサーが柴村の顔をモニターからカメラの方へ向けさせた。柴村は後ろ髪を引かれながらも、グツと腹に力を込めてから、レンズを見た。ここで失敗するわけにはいかない、そう意気込んだ。

『あの、お久しぶりです』

しばらくアナウンサーを交えて芸人らとやりとりをした後、いきなりそんな声がイヤホンから柴村の鼓膜へと響いてきた。スタジオではそうでも無かったのだが、モニターを見ていなかった彼にとって、それは覚悟していたとは言え、まさに不意打ちだった。続け様に、『え、知り合いな？ 嘘でしょ？』などと、他の出演陣らの面白がる声が聞こえた。とつくに知っていた筈なのに、さすが上手いなど、柴村は感心した。

『はい。実は、高校の同級生なんです』

『マジでか！ あ、ミサキちゃんって出身この辺だけ？』

『そうなんですよ。だからもう、ビックリで』

『え、凄くない？』

『何かちよー感動なんですけどおー』

『もしかして、ご主人、ミサキさんのこと、密かに好きだったりとか？』

恋人同士でした、なんて言えるわけがない。言った所で、問題になるどころか、いかにも子供時代の思い出話のように、面白可笑しく茶化されて終わりなのかも知れないけれど、それでも柴村には、ほんの少しでも美咲の迷惑になるかも知れないことは出来なかった。

それに何より、『…え、いや、勘違いじゃ？』と彼女本人に言われることが恐かった。

『そりゃ、好きやろ。だってこんな美人が同級生におったら、クラスの男なんて全員が惚れてまうやん』

関西弁の評論家のしたり顔が見えるような声に、「まあ、そうですね」なんて苦笑いを返しつつ、柴村はカメラのレンズをジッと見た。本心は今すぐにでもモニターを見て、彼女の表情を確かめたかったけれど、それをする代わりに、彼は今の自分を彼女に見せたいと思った。女優としてスカウトされたから、高校卒業と同時に都会に行くから、夢だから、と沢山の理由を付けて、なのに最後の最後まで「あなたを嫌いになったから」と言わずに去った、かつての恋人に、今の大人気女優に、俺だってちゃんと今を生きているんだと見せつけてやりたかった。だって、その為に、今回のテレビ取材を受けたのだから。いい加減、物見遊山の観光客のせいで常連客に迷惑がかかり、もう取材は断ろうと決めていたのに、地元出身の彼女が映画の告知に出ると聞いたから。

「それじゃあ、ご主人からもミサキさんに一言」

アナウンサーに促される。台本では、ここで「映画、絶対に見ます。それから、もし良かったら、また地元に戻ってきて、うちのうどんを食べて下さい」と言う段取りになっていた。

「あの、おめでとうございます」

だから、柴村が実際に発した言葉に、一瞬だけ現場の雰囲気が一瞬だけピリツとした。でも、誰

も止めなかったから、柴村もまた中断しなかった。

「その、ご結婚、されたってニュースで見ても。おめでとうございます」

一瞬の間。それから『ありがとうございます』

いかにも熱心なフアンの声援に応える女優らしい、少しだけにはかみながらも堂々とした声が聞こえて、柴村は今度こそ本当に、彼女は成功したんだなと悟った。

「映画、絶対に見ます。もし落ち着いたら、また旦那さんを連れて、うちの店にも寄って下さい」

「まさに、恋が叶ううどんで末永くお幸せに……って感じですね」

柴村の言葉を引き継いで、アナウンサーがうっとりとしたような声で言う。「しかも、こちらの売りは、うどんだけじゃなくて、他所よりちよつとだけ濃い出汁だそうですよ。濃い出汁、恋だし！」

『はいはい、下らない駄洒落とか要らないんでえ』

「あ、すいませくん」

『それじゃあ、ご主人、本日はありがとうございます』

スタジオからの感謝の言葉が消えるやいなや、「はい、お疲れ様でした」とディレクターの声が響いて、現場の空気が一気に弛緩した。柴村もまた、長々とため息を吐いた。「お疲れ様でした。そりや、緊張しますよね」

と、彼のため息の意味を誤解したのか、アナウンサーが先ほどまでとは打って変わって冷静な、それでいて和やかな口調で彼をねぎらった。それだけで、彼は、彼女もまた、芸能界という場所で必死に頑張る者の一人なのだと悟った。「もし良かったら、また改めて、芸食べに来て下さい」だからだろう、その言葉は自然と彼の口から出た。彼女は一瞬だけきよとんとした表情を見せた後で、「はい、是非」と喜色満面の顔で言った。きっと社交辞令だろうけれど、それでも良いと柴村は思った。

「今日の映像なんですけど、また改めてこちらに送らせて頂きますので」
スタッフの一人がそう言ってきて、柴村は「ありがとうございます」と丁寧に辞儀をした。

「それと、折角なんで、僕等にも全員分のうどんをお願い出来ますか」
断る理由は無かった。

機材や道具の片付けを一段落させて、アナウンサーやスタッフ達が席に着く。柴村はそれを尻目に、大釜の中にうどんを入れる。全員分だつて余裕だ。誰が来たつて、それがうどんを求める限り、食わせてやる。

柴村は視界を真っ白に染める湯気で目を洗いながら、丁寧に丁寧に湯の中で踊る麺をほぐしていく。